

大乘への回心

—法華経、維摩経を読んで—

安井 広 濟

一

1 (安井)

仏教の伝統によると、涅槃 (nirvāna) に有余依涅槃 (sopadhīśesa-nirvāna) と無余依涅槃 (nirupadhīśesa-nirvāna) との二種類があることが認められている。有余依涅槃とは、煩惱を断じつくして、五蘊である肉体のみが残存する状態であり、無余依涅槃とは、五蘊である肉体も残存しない状態である。余依 (upadhīśesa) とは、煩惱を断じて残された、煩惱の所依となる肉体、すなわち五蘊のことで、この五蘊が有るか無いかによって、涅槃が二種類に分たれるのである。仏陀の教説を見ると、涅槃は、煩惱の束縛を断った現法涅槃 (dittha-dhamma-nibbāna) の解脱の境地の如

くであるが、また、煩惱のみならず、肉体すらも滅した灰身滅智の死滅の状態の如くにも思われるのであって、たとえば、ウダーナ第八品を見ると、ダッバマツラプッタが空中に飛び上り、火定に住し、涅槃にはいったときに、仏陀が「身は壞れ、想は滅び、受もまた焼け失せたり。諸行は止息せり。意識は滅尽に達したり。」^①というウダーナを唱いたもうた記述があるが、これは、中観学派のチャンドラキールティによると、無余依涅槃を語る教説と考えられている^②。

しかし、大乘仏教になると、涅槃にたいする考え方が非常に変わってくる。大乘仏教では、煩惱のほかに菩提を認めず、生死のほかに涅槃を認めない。煩惱の生死は、断ぜ

られるべきものでなく、菩提の涅槃へ転換されるべきものであり、菩提の涅槃は、煩惱の生死を超越した彼岸にあるのではなく、煩惱の生死の中に反省され実証されるべきものであって、涅槃は、煩惱を断じた寂滅の状態の如きものとは考えられていない。大乘仏教では、生死と涅槃とは矛盾的に同一である。だから、大乘仏教では、智をもって生死に任せず、悲をもって涅槃に住しない、自覚・覚他の無住処涅槃の菩薩道の教義が語られる。小乗のアラカン道より大乘の菩薩道への転回の大きな要因は、一つには、かような涅槃についての見方の相異にあったように思われる。本稿では、法華経と維摩経とによって、かような涅槃についての見方をうかがいながら、小乗より大乘への回心の意義を考えてみたいと思う。

二

法華経の「方便品」を見ると、「最後身」という言葉が出されている。この言葉は、第八偈と第十二偈によると、「最後の身体を保つもの」(anīma-daha-dhārin) という意味であって、次のように述べられている。

〔仏陀に〕供養し、善逝によって称讃され、漏を減尽した、最後の身体を保つ、世間を知る声聞たちといえ

ども、力のおよぶ領域が、かの勝者の智慧におよばない。(第八偈)

たとえ、すべてのこの世間界が、シャーリプトラの如きものに満ち、一つになって思惟しようとも、善逝の智慧を知りえない。(第九偈)

無漏となり、するどい感覚器官をもち、最後の身体を保つ独覚たちが、蘆や竹のように、すべて十方に満ちて、(第十二偈)

かれらが、一つになって私の最高の法の一部を、一千万ナユタ、無限の劫のあいだ思惟しようとも、その真実の意味を知らないであろう。(第十三偈)

右にあげる「方便品」の偈は、仏陀の智慧 (buddha-jñāna) が声聞や独覚たちに見がたく知りがたいことを述べるものであるが、経偈によって明白であるように、最後身とは、煩惱の漏を減尽した声聞、独覚のアラカンの聖者に冠せられる言葉である。すなわち、アラカンの聖者は、さまざまの修行によって人間的な欲望を断じ尽していくのであるが、その結果、この世における最後の身体に達するのである。視覚や聴覚や嗅覚などの感覚器官のはたらきは鋭敏となるが、枯木の如く身は細り、もう一歩で死という極限の状態にいたるのであって、これが、ここで最後の身とい

われるものであることは、経傷の文面に明らかである。したがって、ここにいわれる最後身は、滅尽定の如き状態をいい、また、最後の身体を保つのであるから、有余依涅槃の状態といえる。かくして、最後の身体をすてる時、無余依涅槃といわれるのであろう。右にあげる「方便品」の偈は、かような涅槃への方向をあゆむ声聞、独覚のアラカンの仏教を語り、それらが仏陀の真実の智慧を知らない人々であることを示している。

しかも、また、「方便品」によると、かような最後の身体を保つ有余依涅槃にはいった声聞、独覚のアラカンたちは、あくまで、自己のアラカン位を主張して、仏陀の真実の智慧である無上正等覚 (anuttara-samyak-sambodhi) にたいする願いをもたない増上慢の者とされている。

シャーリプトラよ、比丘、比丘尼であって、アラカン位 (arhava) を主張し、無上正等覚にたいする願いをもたず、「私は仏乘 (buddha-yana) とは関係がない。」といい、「このかぎりのものが、私の身体、最後の涅槃、(samucchrayasya pascimakanḥ parinirvāṇam) である。」というならば、シャーリプトラよ、それを増上慢の者と知るべきである。^④

「方便品」によると、無上正等覚である仏陀の真実の智

見に入らしめようとするのが仏陀の唯だ一つの目的 (ekakriyā, karāṇīyā, prayojana) なのであるが、声聞や独覚のアラカンたちは、声聞乘や独覚乘に固執して仏乘を理解せず、あくまで自己のアラカン位を主張して、無上正等覚をさとうとうとする願いをもたず、最後の身体の涅槃にとどまらず、この涅槃の状態をよしとする増上慢の者たちなのである。右の経文にいわれる samucchrayasya pascimānirvāṇam (身体の最後の涅槃) というのは、前出の antima-deha (最後の身体) と意味は同じであって、「授記品」では pascīme samucchraye (最後の身体) ともいわれている。^⑤ 要するに、声聞や独覚は、仏陀の教説に示される煩惱の滅尽を涅槃とする道にすすんだ、いわゆる殺賊 (arhan) のアラカンたちであるが、仏陀の真実の智見である無上正等覚を教える大乘に耳をかたむけない頑迷固陋な小乗の人たちであり、煩惱をほろぼした人間の肉体としての最後の極限に達し、これこそが涅槃であると考えているのである。

けれども「信解品」を見ると、かような頑迷固陋な最後の身体に達したアラカンたちが、自己の非を悔い、大乘の無上正等覚へ回心することが述べられている。

世尊よ、われわれは、古齢を重ねて年長者となり、こ

の比丘の教団において長老 (bhāṛia) と認められ、老衰して、涅槃を得たと想い、無上正等覚にたいして、つとめることなく、また、努力をこころみませんでした。しかも、世尊が法をお説きになり、世尊が長くお坐りになり、われわれがその説法にはべっておりましたとき、そのとき、世尊よ、われわれも長く坐り、世尊に長く供養しましたので、身体中がいたみ、節々がいたみます。このために、われわれは、世尊よ、世尊が法をお説きになったとき、空性と無相と無願とをすべて明らかにしましたが、これらの仏法についても、仏国土の莊嚴についても、菩薩の神通についても、如来の神通についても、愛染 (sṛiṅṅa) を生じませんでした。これは、何故かといいますと、われわれは、この三界より出離して、涅槃を得たという想いをもつもの (nivāna-sāñjina) であり、老衰したものであったからです。

右の「信解品」の記述は、スプフーティ (須菩提) と、マハー・カートヤーヤナ (大迦旃延) と、マハー・カーンヤバ (大迦葉) と、マハー・マウドガリヤーヤナ (大目犍連) との四人の回心懺悔の言葉であるが、かれらが最後の身体を保つアラカンたちであることはいうまでもない。か

れらは、煩惱の滅尽の修行をつんで、古齢を重ねた長老となり、老衰して、この世の最後の身体に達し、涅槃を得たという想いをもったアラカンたちであった。しかし、かれらは、ここで、身体がいたみ節々がいたむ老衰の身をかち、涅槃を得たという出離の想いのために、仏陀の真実の智見である無上正等覚にたいして努力しなかったことを悔いている。空性と無相と無願との寂靜の三昧について明らかにきわめたけれど、これらの仏法にたいする愛染の心をおこさず、仏国土の莊嚴や、菩薩の神通や、如来の神通にたいしても愛染の心をおこさなかったことを悔いている。かれらは、空性や無相や無願の寂滅の三昧の境地に沈み、これらを如実の実相として愛染する態度に欠けていたことを悔いたのである。これを如実の實相とて愛染する態度に欠けていたことを悔いたのである。このことを「信解品」の偈では、次のように重ねて述べている。

われわれは、内的な涅槃の滅 (Gradvāṃkiṇa nivṛti) を想い、この「涅槃」の知ほどより以上には達しませんでした。もろもろの仏国土における莊嚴を聞いても、われわれには、なんら喜び (harṣa) がありませんでした。(第四十二偈)

われわれは、これらすべての存在が、無漏であり、寂滅であり、滅と生とをはなれ、この世になんらのものも存在しないと知り、しかし、このように考えて、「これにたいして」信 (śraddhā) をおこしませんでした。(第四十三偈)

われわれは、長夜に仏陀の無上の智慧にたいして愛樂を生ぜず、われわれにとって、これにたいして、なんら願望 (prañidhāna) はありませんでした。しかし、ジナ (仏陀) は、「これが最高の究極 (Para niścha) である。」とお説きになりました。(第四十四偈)

空性を長夜に修習し、涅槃を終わりとするこの身体 (最後の身) において、三界の苦の悩みから解脱しました。われわれによって、ジナの教説が守られたのです。(第四十五偈)

或るときは、われわれはジナの子たちに示しました。最高の菩提 (asra bodhi) にむかって発趣したジナの子たちにたいして、いくばくかの「最高の菩提に堪する」法を、われわれは語りました。しかし、これにたいする愛樂は、われわれにすこしありませんでした。(第四十六偈)

右はマハーカーシャバが述べた言葉であるが、これによ

ると、マハーカーシャバをはじめとするアラカンたちは、最高の無上菩提にむかって発趣した仏子たちにたいして、或るときは、いくばくかの無上菩提 (無上正等覚) の教法を語ったこともあることが知られる。しかし、かれらは、どこまでも、煩惱を滅尽する空性の道を長夜に修習し、三界の苦の悩みから解脱した最後の、身体を最高の究極とする仏陀のアラカンの教説を守り、無上正等覚にたいして愛樂の心を生じなかつたのである。内的な寂滅の涅槃の想いに住し、衆生救済の悲願を語る仏国土の莊嚴を愛樂することがなかつたのである。第四十二偈にたいする漢訳を見ると、「我等は内の滅を自ら謂うて足れりと為し、唯だ此事を了して、更に余事無し。我等、若し、仏国土を淨め、衆生を教化するを聞くとも、都て、欣樂すること無かりき。」といわれている。したがって、無上正等覚が自利利他を内容とするものであり、以上が、かかる自利利他を内容とする無上正等覚を愛樂しなかつたアラカンたちの懺悔告白であることは、明らかである。いいかえれば、以上は、自利利他を内容とする大乘の無上正等覚へのアラカンたちの回心を記録するものであるとも見ることができよう。

仏陀の無上正等覚は、たんなる寂滅の涅槃の如き否定的な境地ではない。自利利他を内容とする無上正等覚の菩薩

道にこそ仏陀の真意があり、声聞、独覚のアラカン道は、真実にいたる方便の道として理解しなければならぬ。仏陀は煩惱の滅尽の道を説いたけれど、煩惱が滅尽した最後の身体の涅槃に究極の真実があるのではなく、煩惱の滅尽の道を通してえられる無上正等覚にこそ、仏陀の究極の真実がある。かような、いわゆる「回小向大」は、法華経の一つの大きな主張である。しかも、法華経の「授記品」では、次のように説かれている。

かれは、最後の身体において、もろもろの兩足尊に供養し、かの無上の智慧を完成し、世間の主となり、無比なる偉大な仙人となるであろう。(第三偈^⑧)

勇者は、最後の身体において、三十二相の姿をたもち、黄金の宝幢に似た偉大な仙人となり、世間を利益する悲愍者(anukampin)となるであろう。(第十九偈^⑨)

成仏の記を授けることは「法華経」以外の大乗經典にもしばしば見られるところであるが、授記とは、無上正等覚の完成が仏教の究極の理想であり願ひであることを示すものである。無上正等覚の理想がなければ、仏教はその存在の理由を失なうのであって、最後の身体のアラカンも、右に見られる如く、究極的には無上正等覚を完成すべきものとして、成仏の記を授けられるのであろう。仏教は、こ

こにはじめて、その存在の意義をもつ。仏教はたんに煩惱が滅尽した最後の身体を目標とする死滅の宗教ではない。

仏教は、煩惱を捨てて死んだ人間になるのではなく、煩惱を目覚めの智慧である無上正等覚へ転換し、大悲愍者となつて、現実に真実に立ちあがる生の宗教でなければならぬ。「信解品」では、スプフーティたちのアラカンが、「声聞にも無上正等覚が得られるであろう。」という仏陀の授記を聞いて、「心甚だ歡喜し、未曾有なるを得たり」と述べているが、これは、仏陀の仏教の究極の理想であり真意である大乘に遇つた回心の喜びの衷心よりの表白であるう。

三

維摩経を見ると、処々に「正位」(hes par gyur ba la hñg pa, hes par hñg pa, hes par, niyāmāvakramana) とごう言葉が出されている。これは、文字どうりには「決定に証入した状態」を意味し、煩惱を滅尽した声聞、独覚のアラカンの状態をさす言葉であつて、漢訳では「正性離生」(玄奘訳)とも翻訳されている。したがつて、これが、「何名ニ正性。謂契経言。貪無余断。瞋無余断。痴無余断。一切煩惱皆無余断。是名正性。」(俱舍論第十)といわれるものに

相当することは、明らかである。「決定に証入した状態」というのは、「涅槃の状態に決定的にはいつている」という意味であろう。しかし、維摩経は、仏陀の無上菩提を、煩惱を去った寂滅の境地に求めず、煩惱の中に実証すべきことを強調する經典であって、かようなアラカンの「正位」をきびしく批判する。たとえば、「仏道品」第八を見ると、マンジュシリー(文殊師利)によって、これが、次のように述べられている。

善男子よ、無為を見るところの正位に住するものは、無上正等覚へ発心することができません。煩惱の蔵所である有為に住し、真理を見ないものこそ、無上正等覚へ発心することができません。善男子よ、たとえば、高原の陸地に、ウトバラ、パドマ、クムダ、プンダリーカーなどの芳香ある蓮華が生ぜず、泥や水中の州にウトバラ、パドマ、クムダ、プンダリーカーなどの芳香ある蓮華が生ずる如く、そのように、善男子よ、無為である正位を得る人には、仏法は生じません。煩惱の泥や水中の州になった人々に、仏法が生じます。たとえば、種子が、空中に生ぜず、地に住して生ずる如く、かくの如く、無為である正位を得る人々に、仏法は生じません。スメール山にもひとしい我見

をおこし、しかも、菩提心を生ずるときに、そこに、仏法が生じます。善男子よ、この考え方によって、煩惱は如来の種姓 (Buddha) であると知るべきです。善男子よ、たとえば、大海にはいらずして、無価の宝珠をうることができないように、煩惱の大海にはいらずして、一切智の心を生ずることはできないのです。

右の文は、無為である正位を得、あるいは、無為を見るところの正位に住した、生死出離のアラカんに仏法が生ぜず、煩惱の中に仏法が生じ無上正等覚への発心が可能であることを、蓮華や種子や大海の喩えによって、まことにたぐみに述べている。無上の菩提は超越的な場所にあるのではなく、現実の煩惱こそ、菩提を実現する場所であり、如来たりうる種姓なのである。氷が水へ転ずるように、煩惱は菩提へ否定即肯定的に転換されるのであって、煩惱のほかに菩提があるのではない。煩惱即菩提であり、生死即涅槃である。無為である正位に住する漏尽のアラカンは、涅槃を得たという想いをもつ人々であろう。これは、さきの法華経でいえば、「最後身」を得た人たちにあたる。しかし、かれらに、現実の涅槃があり菩提があるのではない。煩惱にこそ菩提があり、生死にこそ涅槃がある。右の文は、かような大乘の無上正等菩提の立場を示すまことにた

くみな比喩であり、正位を得、長老となつた最後の身体のアラカンにたいする大きな痛棒というべきであらう。

「仏道品」では、マンジュシリーの右のような煩惱即菩提の発言にたいし、小乗のアラカンであるマハーカーシャパが讚意を表し、次のような回心の言葉を述べている。

善いかな、善いかな。マンジュシリーよ。善く如実に
お説きくださった。煩惱こそは如来の種姓です。「た
から、煩惱を捨てた」われわれ(声聞)の如きものが、
どうして「無上正等」菩提への心をおこし、仏法を悟
ることができましようか。五無間罪をもつものによつ
て、菩提心をおこすことができ、仏法を悟ることがで
きるのです。たとえば、感覺器官が欠けた者によつ
て、五つの欲望の性能には性能がなく能力がないよう
に、それと同じく、一切の結縛(煩惱)を捨てた声聞
にとつて、一切の仏法は性能がなく能力がなく、その
仏法を志願することができないのです。だから、マン
ジュシリーよ、凡夫は如来の恩を知るものであるが、
声聞は恩を知るものではありません。これは何故かと
いえば、凡夫は、仏の徳を聞くことによつて、三宝の
種姓の相続を絶やさないように無上正等覚へ発心する
が、これに反して、声聞は、命のあるかぎり、十力、

四無畏などの仏法を聞いても、無上正等覚へ発心する
ことができないからです。^⑧

このマハーカーシャパの言葉は、小乗より大乘への回心の言葉として注意すべきである。法華經に示されていたように、マハーカーシャパは大乘の無上正等覚にたいする愛樂の心をおこさなかつた小乗のアラカンであるが、ここで、マハーカーシャパは、自分のようなアラカンは、無上正等覚(無上菩提)への心をおこすことの不可能な、如来の種姓たりえないものであり、仏恩に報ずる者でないことを認め、五無間業をもつものによつて、はじめて、無上の菩提心をおこすことができ、仏法を悟ることができる、と
いっている。なぜなら、煩惱を滅尽せしめたアラカンは、
感覺器官が欠如した性能なく能力なき人間であり、仏法をおこす能力がないからである。滅尽の正位を得、最後の身体に達したアラカンは、仏法をおこす能力のない死せる人間にすぎないといつてよい。したがつて、ここで、マハー
カーシャパは、小乗のアラカンの滅尽の道に慚愧の念をもち、大乘である煩惱即菩提の道に愛樂の心を示し、回心を示した、といえる。煩惱の心あればこそ、煩惱を菩提の心へ転ずることが可能であるが、煩惱がなければ、菩提へ転ずる余地はないのであつて、煩惱こそ菩提実現の場所であ

るといふ煩惱即菩提の立場は、迷いより悟りへの心の転換の立場であり、自覚の立場である。煩惱の滅尽をはかるアラカン道を身体的修練の立場とすれば、大乘の無上正等覺は心の自覚的転換の立場といえるのであるが、マンジュシリーは、アラカンの身体的修練の立場もさることながら、究極的な立場としては、かような大乘の無上正等覺の立場に道理を認め、これに回心したと考えられる。

大乘の無上正等覺の立場では、煩惱は菩提をうるための契機となる軽視すべからざる重要な存在であると認められる。これについて、維摩經の「弟子品」の中に、次のようなスプフーティにたいする維摩のおどろくべき説法がある。

あなたが、師である仏陀を見ず、法を聞かず、僧伽にも敬事せず、かの〔外教の〕大師であるプールナ・カーシャパと、マツカリ・ゴーシャリプトラと、サンジャイー・ヴァイラティプトラと、カクダ・カートヤヤーナと、アジタ・ケーシャカンバラと、ニルグララント・ジュニヤーティプトラとが、大徳の師であり、かれらに従って、あなたが出家し、かれら六師が行くところに聖者スプフーティも行き、また、あなたがあらゆる悪見の中にはいって、両極端と中とを了解せず

……また、大徳よ、あなたが食を施す人々を惡道におとし入れ、あなたが一切の惡魔とともにあり、一切の煩惱があなたの朋友となり、煩惱の自性が大徳の自性であり、一切の人々にあなたが秘密の心をいただき、一切の仏陀をそしり、一切の佛法を称揚せず、僧伽によらず、決してあなたが涅槃しないならば、あなたは、この食を受けなさい。^⑧

これは、スプフーティが維摩の家に食を乞いに行ったときの維摩の言葉であるが、この維摩の説法は、一見、宗教や倫理を無視した邪惡の生活をすすめるようであり、スプフーティはこの維摩の説法を聞いて「何の言たるかを識らず。何を以て答うるかを知らず。」(羅什訳)とおどろいている。しかし、むしろこの言葉は、煩惱を断じた滅尽の世界に菩提があるのではなく、煩惱にこそ菩提があり、煩惱が菩提をうるための場所となり契機となる没すべからざる重要な存在であることを語っているのであって、たんに、邪惡の生活をすすめているのではない。大乘の無上正等覺の立場は、煩惱を捨てて死んだ人間になることでなく、生きながら、煩惱の迷いの心を菩提の悟りの心へそだてあげ転換する立場であって、かかる意味においては、煩惱の存在が強調されているのである。これは、仏教が、正位や最

後の身体の涅槃を求めぬ死滅の宗教でなく、無我になって現実に生き、現実に真実に立ちあがる自覚の宗教であり実践の宗教でなければならぬ、ということであろう。大乘で無上正等覚が自利利他を内容とするものとして語られるのは、大乘がかような現実に生きる自覚的な実践の宗教であるからであり、また、声聞や独覚の菩提にたいし、仏陀の菩提が無上の正等菩提（正等覚）といわれるのも、ここに理由があると思われる。煩惱を菩提へ転ずるが故に、煩惱をはなれるが、煩惱をはなれて菩提があるのではなく、煩惱と菩提とは矛盾的に同一である。これは、まさに無上の出来事というべきであろう。維摩經を見ると、煩惱即菩提の矛盾の同一の論調が、經全体にみながり枚挙にいとまがないほど強調されている。二・三の經文を抜萃してあげておこう。

〔在家の〕白い上衣を着ておりながら、比丘の行いによって完成されており、在家にありながら、欲界と色界と無色界とにまじわらず、子供や妻や眷属がありながら、常に梵行をおこない、侍者にとりまかれた姿をあらわしておりながら、寂靜をおこない、裝飾品でかざられた姿をおらわしておりながら、常に〔仏陀や菩薩のような三十二〕相をそなえ、飲食によって食をと

る姿をあらわしておりながら、常に禪定の喜びの食をとり、博奕や遊戯の場所に姿をあらわすけれど、博奕や遊戯にとらわれる人々を成熟して常に効果をあらわし……〔方便品第二より〕^⑧

五無間業の世界へ行っても、害心と賊心と遺恨とがおこらず、地獄の世界へ行っても、煩惱の一切の塵とはなれ、畜生の世界へ行っても、愚痴の闇黒とはなれ、阿修羅の世界へ行っても、我慢と憍慢と憍暴とがなくな……〔仏道品第七より〕^⑨

無漏を観察するけれども、輪廻の心の流れから立ち去らず、行動なきことを観察するけれども、人々を成熟するために行動し、無我を観察するけれども、人々にたいする大慈悲を失なわず、無生を観察するけれども、声聞の正位におちいらない。〔菩薩行品第十一より〕^⑩

右にあげる經文によって、大乘の無上正等覚が、煩惱の现实生活の上に真実に生きる菩提であり、自利利他が円満し具足するものであることは、明らかである。維摩經は、声聞・独覚のアラカンの滅尽の仏教を批判して、かような大乘の無上正等覚の菩薩道への回心をすすめる經典といえる。

以上、法華経と維摩経とによって、小乗のアラカンの仏教と大乘の菩薩の仏教との涅槃觀の相異を考察し、小乗より大乘への回心の意義をうかがった。法華経と維摩経とは、全体的に見て説相の異なった經典であり、それぞれの特殊の性格をもっているのであるが、法華経に見られる「最後身」と維摩経に見られる「正位」とは、いずれも、小乗仏教の涅槃をあらわす言葉であって、兩經典が、いずれもこれらをすてて、大乘の無上正等覺の涅槃への回心をすすめることは、共通して同じである。維摩経は、煩惱即菩提の論理によって、小乗のアラカンの仏教がもつ煩惱の滅尽の道をするべく批判し、煩惱を菩提へ轉換し、生死を涅槃へ轉換すべきことを高唱する。これは、法華経に見られない維摩経のきわだった特色である。しかし、法華経に見られる小乗のアラカンの最後の身体の涅槃より大乘の無上正等覺への回心には、かような維摩経に見られる煩惱即菩提の論理が、その内容をなすのであると思われる。仏教は、たんに禁欲的修練や身体の滅尽によって、煩惱の束縛を脱する道ではない。禁欲的修練も重んじられねばならないが、仏教は、究極的にはあくまで、煩惱を菩提へ転ずる

覺醒の宗教であり、現実に真実に生き、自利他を究極の理想とする宗教であって、法華経も維摩経も、かような仏教精神において変りはない。法華経に、仏乘といひ一乘といひのは、かような大乘の仏教精神をいうのであろう。

追記

なお、筆者は維摩経の煩惱即菩提の思想がもっている在家主義的な性格や宗教的性格について論じたことがあるが（拙著「維摩経略解」、東本願寺出版部、昭和五十一年刊）、ここでは、これらの点についてふれず、もっぱら、小乗のアラカノ道より大乘の菩薩道への問題を、法華経と維摩経との共通課題として考察をすすめた。

註

- ① ウダーナ第八品、九。
- ② 梵文月称中論釈、五二〇頁、四行。
- ③ Saddharmapuṇḍarīka-sūtra, ed. by Wogihara and C. Tsuchida, p. 29, l. 24—p. 30, l. 22.
- ④ Ibid., p. 40, ll. 9—13.
- ⑤ Ibid., p. 131, l. 6.
- ⑥ Ibid., p. 95, l. 11—p. 96, l. 2.
- ⑦ Ibid., p. 109, l. 18—p. 110, l. 16.
- ⑧ Ibid., p. 132, l. 11.
- ⑨ Ibid., p. 135, l. 12.
- ⑩ 影印版西蔵大蔵経、諸経部八(34)、九一、三、七—四、

⑫ ⑪ 五。
同右、九一、四、六一五、三。
同右、七九、二、四一三、二。

⑮ ⑭ ⑬
同右、七七、二、五一八。
同右、九一、一、一一三。
同右、九八、一、三一四。